

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

- 翻訳についての断章 山岡洋一
 - 翻訳とアニマル・スピリット
本来の翻訳の基礎には、合理的な計算を超えた感情がある。翻訳の本質を理解するには、この非合理的な感情について考えていく必要がある。
- 翻訳とは何か——研究としての翻訳（その4） 河原清志
 - 品詞転換論
世には翻訳教則本が多く出版されており、様々な翻訳テクニックが紹介されている。その多くで説かれているのが、「品詞転換」の技法である。そこで本稿では、数多くある翻訳技法のうち、「品詞転換」に焦点を当てて、翻訳学と言語学の立場から論じてみたい。
- お知らせ（再掲載） 山岡洋一
 - 最難関を目指す「翻訳通信」翻訳コンテスト
- 読者からの投稿 山岡洋一
 - 大野一訳『闇の奥』第1章について
若手翻訳家の大野一さんがコンラッド著『闇の奥』第1章の新訳を投稿してくれた。中野好夫訳、黒原敏行訳などの既訳にはない魅力があると判断し、今月号の別冊で紹介することにした。

翻訳通信 〒216-0005 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC012007@nifty.ne.jp
(アットは@に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳とアニマル・スピリット

もうかなり前になるが、真夏の暑さに耐えかねてはじめて軽井沢に行ってみた。第1印象は繁華街のような人波と意外なほどの暑さであった。高原だからか直射日光が厳しく、汗が噴き出す。避暑地ではなかったのかと不満だった。ところが、昼食後に訪れた旧軽井沢は嘘のように涼しかった。そうか、これが軽井沢かと思ったのを覚えている。軽井沢はその後も数回しか行っていないので、ほとんど何も知らない。それでも、軽井沢という地名に騙されないだけの知恵は身につけたように思う。旧軽が本来の軽井沢なのだ。それ以外はいってみれば、全国にある何とか銀座のようなものなのだ。だから、軽井沢がどういうところかを知りたければ、周辺にある何とか軽井沢を除外して、旧軽井沢について考えるべきである。

同じことが翻訳にもいえる。日本の翻訳には栄光の歴史がある。だから、いまでは翻訳と呼ばれているものはじつに広範囲にわたっている。翻訳について考えるときにはまず、分類学が必要になるほどだ。言語別にみれば、外国語から日本語への英日翻訳、仏日翻訳、独日翻訳、中日翻訳などなどがあり、日本語から外国語への翻訳には日英翻訳、日仏翻訳、日独翻訳、日中翻訳などがある。用途別には出版翻訳、産業翻訳（実務翻訳）、映像翻訳などがある。分野別には文芸翻訳、ノンフィクション翻訳、技術翻訳などがある。こうやって分類していくと、翻訳は多種多様だということになり、全体の特徴をつかむのは難しくなる。ましてや、本質を理解することなど不可能に近くなる。翻訳とは何かを知りたければ、まずは本来の翻訳を対象を絞るべきだ。

では、本来の翻訳とは何か。日本の翻訳のうち栄光の歴史を築いてきた部分は、幕末・明治以来、欧米の進んだ文化を取り入れるために行われてきたものである。言語別には欧米の言語から日本語への翻訳であり、用途別には主に出版翻訳である。分野は広範囲にわたっているが、欧米文化の精髓の部分であることは確かだ。これが日本にとって本来の翻訳なのであり、翻訳の本質を考えるのであれば、まずはこの部分に焦点をあてるべきだ。

欧米なら、たとえばルターによる聖書の独訳やティンダルによる聖書の英訳が本来の翻訳にあたるのだろうか、いずれも500年近く前のことだ。日本の場合は150~200年前に本来の翻訳がはじまり、その後も続いてきた。だから翻訳の本質を考えると、日本の方がはるかに有利だといえる。柳父章の著作をはじめ、日本に優れた翻訳論が多いのは、偶然ではないと思う。

そこで、幕末・明治以降の本来の翻訳を対象を絞って、翻訳の本質を考えていきたい。本格的な翻訳論を展開することはまだできないので、ヒントになりそうな点を指摘するだけにしておきたい。

本来の翻訳が欧米から進んだ文化を学ぶことを目的としているのは明らかだ。「学ぶ」ことが目的なのである。だが、ここで指摘しておきたいのは、「学ぶために翻訳する」ことが、まったく正しい選択だったにしても、合理的な選択だとはいえない点である。合理的どころか、ある意味で非合理的だといえるとも思えるのである。非合理的であるのは悪いことではない。合理的な計算からは冷静で落ち着いた行動が生まれるが、非合理的な感情からは常識外れのエネルギーが生まれうるからである。そして、翻訳には並外れたエネルギーが必要である。

非合理的だというのはこうだ。第1に、ルターやティンダルの場合とは違って、幕末・明治の翻訳者は原著を理解できているわけではなかった。理解できないから翻訳して学ぼうとしたのである。「学ぶ」というのはそもそもそういうものなのだ。学ぶ対象が理解できていれば学ぶ必要はない。理解できていないから学ぶのである。では学ぶ対象をどうやって選ぶのか。理解できていないものなから、学習対象を合理的に適切に選ぶことができるのだろうか。できるはずがない。いまは理解できていないが、学べば理解できるはずだし、素晴らしく価値が高いものに違いないと信じて選択する。

幕末から明治初期にかけては時代を代表する天才が翻訳に取り組んだのだが、なぜ欧米の文化を学ぼうとしたかは明らかである。当初は医学や軍事とい

う技術の分野で、やがてはもっと広範囲な分野で、欧米が圧倒的に進んでいる事実を突きつけられて衝撃を受けたからだ。もっと客観的に全体像を確認していけば、たしかに欧米が圧倒的に進んでいる面があるにしても、そうとも言い切れない面もあることに気づいたかもしれない。だが、当時はそんな余裕はない。全体像を理解することなど、とてもできなかったのである。だから、闇雲に学ぶしかない。学ぶということはそもそもそういうものなのだ。

幕末には、敵と戦うにはまず敵を知らなければならぬという合理的な考え方もあったように思える。だが明治に入ると、そのような合理的な計算よりも、欧米への無条件の憧れが強くなったとみられる。衝撃と無条件の憧れは、何かを必死に学ぼうとするとき基本になるものである。非合理的ではあるが、合理的な計算を超えた何かがあれば、人は命がけで何かを学ぼうなどとはしないものだ。

以上は「学ぶ」という行為にかならずついてまわる非合理性である。だが、「学ぶために翻訳する」という選択は、別の意味でも非合理的だといえるはずである。

この点は、たとえば一時期の MBA ブームをみてみればよく理解されるはずだ。大手、中堅の金融機関や企業が毎年、何人かの優秀な若手をアメリカの一流ビジネス・スクールで学ばせるのが常識になっていた時期がある。この分野の教育ではアメリカが圧倒的に進んでいるとみられていたし、日本企業の国際化（いまの言葉ではグローバル化）を進めるには MBA を取得した幹部の育成が不可欠だとみられていたからだ。その結果はどうなったか。優秀な若手社員を派遣した金融機関や企業にとっても、MBA を取得した若手にとっても、苛立ちが募る結果になったことが少なくないようだ。若手は、2 年間の留学を終えて帰国したとき、ビジネス・スクールで学んだ理論を社内で活かさない現実にぶつかる。アメリカと日本では企業や経営、社会、文化が違いすぎるからだ。そこで、MBA を武器に転職をはかる人が多かった。外資系か海外に新天地を求めたのである。金融機関や企業にとっては将来の経営幹部になる人材を奪われ、新卒採用以来の投資がすべて無駄になるわけだから、とんでもないことであった。

これに似た現象には、たいていの開発途上国がぶつかっている。教育は開発に不可欠だから、貧しい国でも力をいれている。ところが、教育の最終段階

として優秀な若者を先進国に留学させると、戻ってこないことが多いのだ。いわゆる頭脳流出が起こるのである。これでは教育投資が無駄になる。だが若者にとっては、留学して学んだ優れた知識を活かせる状況が本国にないのだから、留学先に永住したいと考えるのは当然である。

ところが幕末・明治に日本から留学した若者の多くは先進国に永住するのではなく、日本に戻って、留学先で学んだことを翻訳という方法で国内に伝える道を選んだ。その際にぶつかった困難は、昭和末期から平成初期にかけて MBA を取得した若者がぶつかった困難とは比較すらできない。何から何まで違う。社会や文化、技術や知識はもとより、言語の性格まで違っていたのである。そのなかで翻訳という方法をとって欧米の文化や知識を丸ごと学ぼうとしたのは、個人としては非合理そのものの選択であったはずだ。そして、この非合理的な選択があったから、いまの日本があるのである。

幕末・明治の先達はなぜこのような方法を選択したのか。2 つの強烈な感情があったからだと思える。一方には前述のように、欧米への無条件の憧れがあった。これは逆にいうなら、自分たちは遅れているという強烈な思いであった。他方には、やはり強烈な民族意識があったはずである。個人としての合理的な計算をすべて無視し、「学ぶために翻訳する」方法を選び、あえて困難な道を歩もうとしたのは、民族意識が強烈だったからに違いない。翻訳するというのは、言語共同体としての民族全体が先進的な文化や知識を学ぶためという目的がなければ、意味をもたないからだ。個人が学ぶためであれば、翻訳する必要はない。

欧米への憧れと民族意識という 2 つの強烈な感情はどちらも合理的だとはいえないものであると同時に、たがいに矛盾するものであることに注意すべだ。言語共同体としての民族という観点では、一方は劣等感であり、他方は優越感なのだから。この矛盾が明治以降の日本の歴史を動かす要因になってきたし、日本の翻訳の歴史を動かす要因にもなってきたと思える。たとえば異化と同化（foreignization vs. domestication）のせめぎあいも、この矛盾を考えれば理解しやすくなる。

幕末・明治の人たちが欧米の先進的な文化や知識を翻訳という方法で学ぼうとしたとき、どのような困難にぶつかったのかは、柳父章の翻訳論で論じら

れている。語彙の面では、たとえば **society** という語をどう訳せばいいかが分からなかった。この語で表現されている概念が日本にはなく、概念の基礎にある現実が日本にはなかったからだ。そこで、まずは訳語を決めることにした。「社会」という語は、**society** の訳語として作られた語であって、当初は原文のこの部分に **society** があることを示す役割しか担っていなかった。

また、日本語には文という概念がなかったので、センテンスを訳すために句点を作り、句点で区切られた文を作ることになった。日本語には主語がなかったので、「～は」で代用することにした。日本語には現在形、過去形がなかったので、「～する」「～した」で代用することにした。こうして、幕末・明治の翻訳でとられた異化戦略の結果、いまの日本語が作られてきた。江戸時代までのいわゆる古文と、現在のいわゆる現代文が違うのはかなりの部分、異化型翻訳のためなのである。

翻訳のために作られた言葉や文体はすぐに、翻訳以外の文章でも使われるようになっていく。その際にも欧米への憧れが大きな要因になったように思われる。文明開化の時代なのだから、翻訳語や翻訳文体こそが新しい時代にふさわしいと思われたのだろう。

その後、劣等感と優越感のうちどちらが強くなるかで、日本語についての感覚が変化し、翻訳についても考え方も変化してきた。最近では、日本社会が成熟したことから、民族意識は弱まっており、劣等感と優越感という矛盾した感情も克服されてきているようだ。異化型翻訳の典型である翻訳調が規範としての力を失ってきた背景には、このような意味での社会の成熟があると思われる。

では、本来の翻訳の本質部分に非合理的な感情があることをどう考えるべきなのだろうか。おそらく、当然のことなのだと思う。

他の分野の例をみると、経済はそもそも利害で動くものなので、合理的な計算に基づいているのが当然だと思えるはずである。そして、合理性が経済の基本だという常識があるために、経済学も合理性を基本にしている。経済学が文系の学問だったのは過去の話であり、いまでは高等数学とまではいなくても、ある程度の数学が必須になっている。理系の人間にしか理解できないものになっているので

ある。だが、経済の基礎には合理性を超えた感情があることは、経済学でも認識されている。

その一例が、アニマル・スピリットである。ケインズが名著『雇用、利子、通貨の一般理論』で使った用語であり、企業の投資行動を決める要因だとされている。中央銀行が政策金利を引き下げ、その結果、企業が資金を調達するときの金利が下がっても、それだけで企業の設備投資が盛んになるわけではない。企業経営者のアニマル・スピリットが衰えれば、設備投資は増えない。アニマル・スピリットとはまさに合理的な計算を超えた感情なのであり、経済ですら、これが決定的な意味をもっているのである。

翻訳は企業経営と比較すれば、合理性を重視しているとはいえない。経済や企業経営で非合理的な感情が重要なのであれば、翻訳でも合理性を超えた感情が重要な要因になっていても不思議だとはいえないはずである。

いまの翻訳に話題を移すなら、いわゆる翻訳調が嫌われているのは当然だと思う。だが、それに代わって登場したとされる「読みやすく分かりやすい翻訳」はどうなのだろうか。これがいま、ほんとうに好まれているのだろうか。個人的な感情をいうなら、「読みやすく分かりやすい翻訳」には翻訳調と変わらないほどの嫌悪感をもっている。幼稚な文章、精緻な論理を伝えられない文体がもてはやされているからだ。日本語の実力はこんなものではない、もっと美しいし、もっと論理的なのだと思う。だから、「読みやすく分かりやすい翻訳」を超えるものを目指している。これもまた非合理的な感情なのであり、正しいかどうかはまったく分からないのだが。

品詞転換論

世には翻訳教則本が多く出版されており、様々な翻訳テクニックが紹介されている。その多くで説かれているのが、「品詞転換」の技法である。そこで本稿では、数多くある翻訳技法のうち、「品詞転換」に焦点を当てて、翻訳学と言語学の立場から論じてみたい。本稿は101号（翻訳シフト論）の続きの位置づけである。

翻訳のテクニックとは何か

そもそも、プロの翻訳者が唱える翻訳のテクニックとは何か。翻訳技法とか翻訳方略などとも言われるが、特定の技法を使えば、単なる英文和訳から、プロの翻訳のレベルに質的に向上するという、アマとプロを分かち秘訣のように説いている翻訳教則本が多くある。他方、そのような技法は一面に過ぎず、必ず常に成り立つものではないとの主張をプロの翻訳家からも耳にする。

翻訳学の立場からは、それにどう答えるべきか。あくまでも私見だが、本稿では翻訳シフトの観点から述べてみたい。

翻訳技法は、現場でどのように翻訳を行っているかについて、実務家が実務経験上体得した方法論を項目別に分けて体系化したものだと考えられる。実務経験を意識化した部分について語っているので、当然、人によって意識化される部分は異なり、力点の置き方も異なる。そこで、研究として翻訳技法を分析する場合、多くの実務家が説いている翻訳技法を整理し体系化する作業と、原文と翻訳物のテキスト同士を比較対照分析し、そこから析出されることを整理し体系化する作業の2つが必要となる。後者は別の機会に譲り、本稿では前者について論及したい。

品詞転換論—英文法と翻訳実務家の視点

品詞転換で代表的なのは、無生物主語の訳し方を論じたものである。ほとんどの英文法書が無生物主語について論じているが、奇妙な現象がある。英文法の体系は田中茂範氏によれば、規則の文法（活用、語順など約束事の集合）、チャンク文法（情報単位としてのチャンクの形成とチャンキングの仕方）、語彙文法（語彙から文法を捉えることによる知識の関連づけ）、表現文法（意味・機能と慣用構文の関係の分類・整理）の4つに範疇分けできるが（田中茂範『教育英文法』未刊行）、この「無生物主語（構文）」だけは、それを日本語にどう訳すべきか

についての「翻訳論」が示されている。日本人が著した代表的な英文法書を挙げてみると、江川泰一郎『英文法解説』（pp. 25-30、なお名詞構文に関しては pp. 30-40）、宮川・綿貫・須貝・高松『ロイヤル英文法』（pp. 721-722）、安井稔『英文法総覧』（pp. 403-404, 496-497）で無生物主語に触れている（但し、安藤貞雄『現代英文法講義』では触れていない）。名詞を副詞的に訳すとか、文にほどいて訳すなどといった品詞転換論の典型的な記述が見られる（但し、その理由については深く論じていない）。

では、翻訳実務家が著した翻訳教則本ではどうだろうか。たとえば、安西徹雄『翻訳英文法—訳し方のルール』では、無生物主語の訳出法だけでなく、所有格、動名詞、“of”、形容詞・副詞の訳し方において品詞転換論を展開している。その他、筆者が手元を持っている翻訳教則本のなかで、品詞転換論を翻訳技法のひとつとして挙げているものを順不同に列挙する（ここでは筆署名と書名を記す）。

安西徹雄『英語の発想』・『翻訳英文法徹底マスター』・『翻訳英文法トレーニング・マニュアル』、安西徹雄・井上健・小林章夫（編）『翻訳を学ぶ人のために』、田辺希久子・光藤京子『プロが教える基礎からの翻訳スキル』、亀井忠一『頭からの翻訳法』、中村保男『翻訳の秘訣 理論と実践』、三好弘『すぐつかめる英語翻訳のコツ』、横井忠夫『誤訳悪訳の病理』、荒竹三郎『英文翻訳ルールブック』、別宮貞徳『翻訳読本 初心者のための八章』、中村眞佐男・氏木道人・氏木孝仁『翻訳入門—英日編—』、岳真也『英日翻訳文章表現法 英文和訳から翻訳へこなれた日本語表現の技法』、竹下和男『英語は頭から訳す 直読直解法と訳出技法 14』

この中で最も網羅的に扱っているのが、中村保男『翻訳の秘訣 理論と実践』で、以下の細項目を挙げている。

- (1) 名詞→動詞、(2) 名詞→形容詞、(3) 名詞→副詞、(4) 形容詞→副詞、(5) 形容詞→名詞、(6) 形容詞→動詞、(7) 副詞→名詞、(8) 副詞→動詞、(9) 副詞→形容詞、(10) 副詞→独立構文

また、背後にある原理を示したものは、井上健・小林章夫（編）『翻訳を学ぶ人のために』と安西徹

雄『英語の発想』である。

日本語の特性

- ①主語、代名詞をかなりの程度まで省略することができる（省略したほうが自然）。
- ②西欧語とはその構造、語順を大きく異にする（翻訳に際しては、たとえば、[主語 S+動詞 V+目的語 O+α] を [主語 S+目的語 O+α+動詞 V] に書き換えるなどの構造、語順の変換が必須）。
- ③それゆえ訳出に際して、単語レベルでの一対一対応を追い求めることには、ほとんど意味がない。
- ④西欧語とは品詞の機能を大きく異にする（品詞を読み替えて訳すことが不可欠）。

さらに次の条項を加えれば、欧文と対比したときに浮かび上がってくる日本語の特性の主たるものは列挙したことになる。

- ⑤時制の規則がゆるやかである（原文の過去時制をすべて「…た」に対応させて訳すと過度に単調になりがち）。
- ⑥関係詞に相当するものを持たない（関係詞節をすべて先行詞にかけて訳すと文意が錯綜しがち）。
- ⑦性・年齢・地位・階級等の別が、人称代名詞の選択、文末語に明瞭に表れる（「私」「僕」「俺」などの一人称代名詞、「…わ」「…よ」などの文末語によって発話者が特定しやすいので、話者を示す“he said”などは、訳出に際しては省略可能）。
- ⑧欧文よりは視覚に訴えるところが明らかに大きい。

井上健「『第三の文学』としての翻訳文学」（安西・井上・小林（編）『翻訳を学ぶ人のために』pp. 184-185）

日英語の表現・発想の違い

- ①英語では名詞で書いてあっても、日本語ではこれを動詞に読みほどこいてやったほうが、自然な訳文を得やすい。
- ②英語ではくもの>を主語にした構文になっても、日本語では人間を主体にした表現に変えたほうがついて行きやすい。
- ③英語では、重要な情報は文章の前の方にくるのにたいして、日本語ではむしろ、力点は文末に来る傾向がある。
- ④日本語では、主語の働きは動詞によって果たさ

れる面が多い。だから、わざわざ主語を表に出す必要のない場合が少なくない。

- ⑤日本語は一般に直接法が得意である。ところが英語は、むしろ間接話法を得意とする。
- ⑥日本語では、物事全体が自然にそうなったというような表現を好むのに対して、英語ではこれを人間の「行動」として捉え、「動作主+他動詞+目的語」の形で表現することを好む。

安西徹雄『英語の発想』（pp. 22, 32-33）

この2つは共通点と相違点があるが、品詞転換の根拠になる特徴は共通して挙げている（井上の④、安西の①②）。しかし安西はあくまでも実務の立場、長年の経験や勘に基づいてこの6つのポイントを提示しているため、理論的根拠が薄いことは否定しきれないと本人も認めているし、井上も8つの日本語の特性の背後にある原理には言及していない。

品詞転換論—翻訳学の視点

では、翻訳学ではどうだろうか。これは翻訳通信101号で扱った「翻訳シフト論」と関係する。つまり、起点テキストを目標テキストに訳す場合、目標テキストらしい訳文を得る操作をするために、様々な翻訳シフトという転換操作を行う。これには言語構造上の違いから義務的に行わなければならない義務的シフトと、その言語らしさを獲得するために選択的・主体的に行う選択的シフトとがある。その細目を扱ったのが、翻訳方略（ストラテジー）といわれるものである。以下、代表的なものを挙げてみたい（翻訳は筆者によるもので、稲生衣代氏との共著「英語ニュースの字幕翻訳ストラテジー」（2010年、青山学院大学英文学会（編）『英文学思潮』第83巻）から引用している）。

Vinay & Darbelnet (1958/1995)

7つの手続き、方法

- ・直接的翻訳：①借用 ②語義借用③直訳
- ・間接的翻訳：④転位 ⑤調整 ⑥等価 ⑦翻案

Nida (1964) 5つの調整技術

- ①追加 ②代替 ③変更 ④脚注 ⑤言語から経験への調整

Catford (1965) 翻訳シフト

- ・レベルのシフト（文法から語彙へのシフト）
- ・カテゴリーのシフト
- ①構造的シフト ②クラスのシフト ③ユニットのシフト ④体系内シフト

Newmark (1988)

- ・8つの方法（テキスト全体に関係）
- ①語対応訳 ②直訳 ③忠実訳 ④意味訳 ⑤翻案

⑥意識 ⑦慣用語法に則した訳 ⑧コミュニケーション重視訳

・15 の手続き（センテンスおよびそれ以下の単位）

①転移 ②文化的等価 ③記述的等価 ④同義語
⑤語義借用ないしなぞり ⑥調整 ⑦補償⑧クプレ
⑨同化 ⑩機能的等価 ⑪成分分析 ⑫シフト
または転位 ⑬広く認められた訳語 ⑭言い換え
⑮註、註解

Chesterman (1997)

・10 の統語的ストラテジー

①直訳 ②語義借用、なぞり ③転位 ④ユニット
のシフト ⑤句構造の変更 ⑥節構造の変更 ⑦セン
テンス構造の変更 ⑧結束性の変更 ⑨レベル
のシフト ⑩レトリックスキーマの変更

・10 の意味論的ストラテジー

①同義語 ②反意語 ③上位語 ④反転 ⑤抽象化
の変更 ⑥強調 ⑦拡張、圧縮 ⑧言い換え ⑨比
喩の変更 ⑩他の意味論的変更

・10 の語用論的ストラテジー

①文化フィルター ②追加、削除 ③明示化、暗
示化 ④対人的変更 ⑤言語行為の変更 ⑥一貫性
の変更 ⑦部分的翻訳 ⑧可視化の変更（註、註
解など） ⑨翻訳編集 ⑩他の語用論的変更

品詞転換は、Vinay & Darbelnet (1958/1995) では④、Catford (1965) では②、Newmark (1988) では⑫、Chesterman (1997) では③が該当する (Nida 1964 は不明)。

これらは、さまざまある翻訳技法を精緻に体系化して優れてはいるが、西欧語どうしの翻訳の分析から生まれたものであるし、また、なぜそのような品詞転換を行わなければならないのか、あるいはおこなったほうがよいのかについての理論的根拠を与えてくれるものではない。

品詞転換を行う根源的な理由として、一般には、(1) 正確で (accuracy) (2) わかりやすい (naturalness) 翻訳を実現するためであると考えられる。しかし、何をもって正確でわかりやすい翻訳とするかについては、「直訳」対「意識」の古典的な対立以来、理論上いまだに解決を見ていないと言ってよいし、また、現実的にも、翻訳の目的 (skopos) や規範 (norm)、翻訳のジャンルの違いや権力関係などの諸要因によって、優れた翻訳、適切な翻訳の機制要因は変わりうる。

ところが、一般的な意味で、ある特定の言語の「自然さ」や「言語らしさ」は存在していることは否定できないし、その言語の話者であれば誰もそ

の言語の「自然さ」や「言語らしさ」を支える「言語感覚」を持ち合わせている。この「言語感覚」には、(1) 語彙レベルにおける範疇化 (categorization) の問題として捉えられる側面、(2) 文法範疇レベルにおける事態構成 (construal) の問題として捉えられる側面、(3) テキストやレトリックのレベルにおけるテキスト構成 (text organization) の問題として捉えられる側面など、諸側面がある。

本稿が分析する品詞転換で問題となる「言語感覚」とは、(2) を想定したその言語の特徴、もっともらしさ、自然さを表象する何らかの典型 (prototype) である。そこで、ここでは文法範疇に限定して「言語らしさ」について分析し、翻訳の実際において、「言語らしさ」を確保するための品詞転換という転換操作 (conversion) をどの程度行うのか、あるいは行うべきかについて、具体例に即して検証してみたい。

品詞転換論—認知言語学の視点

品詞転換に関しては、他の言語学の分野からのアプローチもいろいろと可能であろうが、本稿はそちらには立ち入らず、近時研究がかなり進んできた認知言語学の観点から論じてみたい。

近時、この文法範疇に関する言語ごとの典型性に関して、一般的な傾向として、いくつかの典型的な言語現象に焦点を当てたうえで、ある言語の特性を複数抽出し、その上で (認知) 言語類型論として概括する試みが盛んになされている。

包括的な議論は、拙著「英日語双方向の訳出行為におけるシフトの分析—認知言語類型論からの試論」(2009年、日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会(編)『翻訳研究への招待』第3号所収)をご覧頂きたいが、かいつまんで主だった理論を紹介したい。以下は、永井那和氏との共著「認知言語類型論に基づく日英通訳・翻訳における品詞転換方略の分析」(2005年、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科(編)『異文化コミュニケーション論集』第3号所収)をほぼ踏襲している。

(1) 日英語間の発想・表現の違い

認知言語類型論の知見に基づく英語と日本語の発想と表現の違い、事象の捉え方や言語化の違いに関して池上(1982)が興味深い仮説を立てている。

仮説 I

・言語外的な出来事が言語によって表現される場合、(1)その出来事に関与するある特定の個体に

注目しその個体を際立たせるような形で表現を構成する傾向、(2)その出来事を全体として捉え、そこに関与する個体があっても全体に含め、いわばそこに埋没させるような形で表現を構成する傾向、がある。英語は(1)の言語であり、日本語は(2)の傾向が強い。

(池上 1982, p. 72)

仮説Ⅱ

・言語外的な出来事が言語によって表現される場合、(1)その出来事に関して<動作主>として行動する<人間>に注目し、それを特に際立たせるような形で表現を構成する傾向、(2)その出来事を全体として捉え、そこに<動作主>として行動する<人間>が関与していてもなるべくそれを際立たせないような形で表現を構成する傾向、がある。英語は(1)の傾向が顕著な言語であり、日本語は(2)の傾向が強い。

(池上 1982, p. 83)

英語と日本語における物事の認知の仕方について、他に荒木(1985)、Hartman(1954)、佐久間(1941)が同じような指摘をしているが、共通点を簡潔に抽出すると、英語は行為する主体を積極的に言語化する「何物かがしかする」言語であり、一方で日本語は主体を状況全体ないし物事の推移に埋没させ、「おのずから然る」(佐久間 1941)言語と位置づけることができる。この指摘は安西が提示した6つのポイントで言えば、①・②・④・⑥に対応するだろう。ここで池上らの主張を踏まえて以下の例文と訳例を見比べてみると、英語と日本語の言語化の違いが垣間見える。

例文(1) : Has it arrived yet?

訳例 : もうついた?

例文(2) : Do you have a pen?

訳例 : ペン持ってる?

例文(3) : We are going to marry next month.

訳例 : 私たち、来月結婚することになりました。

この3つの例文が安西のポイント④・⑥に対応していることは明らかである。しかしここで重要なのは、英語で言語化されている要素を日本語の訳例では省略してみたり、主体性を状況に埋没させたりして日本語の言語的傾向に沿った訳出をしているということが言語学的にも支持され得る可能性を示唆しているという点である。これ以降、さらに英語と日本語の発想・表現の違いを炙り出すために両言語の相同性に着目して考察を進めたい。その際、池上

(1981, 1982, 2000)を参考に、HAVE 言語と BE 言語、「モノ」的言語と「コト」的言語、「する」的言語と「なる」的言語、「個体」スキーマの言語と「連続体」スキーマという両言語の特徴付けに従って論を進める。

(2) HAVE 言語の英語・BE 言語の日本語

英語は日本語と比べると、「動作主+他動詞+目的語」という語順がかなり固定されている。この傾向は例えば両言語における所有表現を見ると顕著に現れる。この点で英語は HAVE 言語、日本語は BE 言語と分類して考えることができる。

例文(4) : John has two children.

訳例 : ジョンには子供が2人いる。

確かに翻訳調の文体を取り込んだ HAVE 的な言い方がある程度日本語に定着してきてはいるものの、この例文の所有表現を「ジョンは2人の子供を持っている」と訳出すると、日本語としてはやや不自然になってしまう。例文と訳例からも明らかなことであるが、日本語では<存在>の機能を持つ<ある・いる>で所有を表すのに対し、英語では前述した「動作主+他動詞(HAVE)+目的語」の構造が守られている。注目すべきは、「ジョン」と「2人の子供」の関係を見ると、日本語・英語における「ジョン John」と「2人の子供 two children」の関係性の違いが文法という観点からも伺うことができるという点である。池上(1982)によると HAVE 言語の<所有>表現は、<人間>的な項を目立たせるという点では BE 言語よりも一段階進んでおり、英語では所有者である<人間>を表す項は、主語という文法的にも特権的な地位を与えられている。さらに BE 言語では一応自主性を保っている<存在物>=「2人の子供」を表す項が英語では文法的に「目的語」化され、それが HAVE を通じて人間の<所有>の<対象>となっていることが明確な形として表示されている。他方、逆に BE 言語である日本語の表現は、<存在>を表す形式に<所有>の機能を担わせおり、HAVE 言語である英語ほど二つの項の関係性は明確に表されていない(後述、例文8-10の【分析】における「数量詞遊離」参照)。

(3) 「モノ」的言語の英語・「コト」的言語の日本語

池上(1981)は、英語の HAVE 言語的傾向、日本語の BE 言語的傾向という対立に加え、両言語における「モノ」志向性と「コト」志向性という対立

概念も提示している。

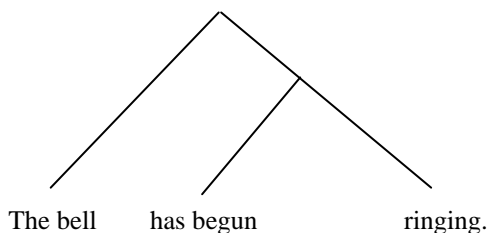
ある出来事が表現される場合、そこに何らかの個体（典型的には動作の主体）を取り出し、それに焦点をあてて表現する場合と、そのような個体を特に取り出すことなく、出来事全体として捉えて表現する場合とがある。（中略）前者が<モノ>志向的な捉え方であるとすれば、後者は<コト>志向的な捉え方と言えよう。

（池上 1981, pp. 94-95）

この主張から、英語は「モノ」的言語、日本語は「コト」的言語に分類されるのだが、ここで具体例を見てみよう。例えば *The bell has begun ringing.* という状況を英語と日本語ではどのように認識されるか考えると以下のように図示される（池上 1981）。

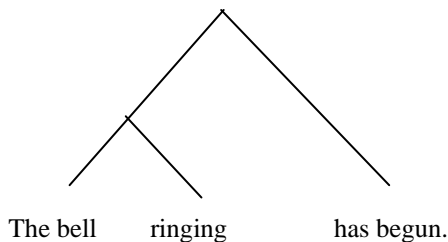
① 「モノ」志向的な捉え方⇒英語

[[鐘が][鳴り][始めた]]



② 「コト」志向的な捉え方⇒日本語

[[[鐘が][鳴り]][始めた]]



池上は、ある一つの同じ現象でも日本語と英語は言語化する際に上の図のような捉え方の差異が傾向として認められるのではないかと主張している。つまり今取り上げている例文 *The bell has begun ringing.* のような現象を捉える際、①では<鐘>が鳴り始めたというように<モノ>が注目すべき対象として選ばれ、前面に押し出されているのに対し、②では、同じ現象でも捉え方が異なり、チャンクを見ても<鐘の鳴る>のが始まったという<コト>を、出来事全体を構成する一つの部分として捉えているという

ことになる。この考え方が、英語が「モノ」的、日本語が「コト」的言語と大きく分類することができるという主張の基盤となっている。ではこのような事象の捉え方の違いを加味することによってどのように日本語の訳出へ反映させることができるだろうか。以下の例文と訳例を見てみよう。

例文(5) : *Do you know of the millions in Asia that are suffering from protein deficiency because they get nothing but vegetables to eat?*

訳例 1 : 食べるべきものは野菜以外には何物もないため、たんぱく質不足で苦しんでいるアジアの何百万人の人々を知っていますか。

訳例 2 : アジアの何百万人という人たちは、野菜以外に食べるものがないために、たんぱく質不足で苦しんでいること[の]を知っていますか。

例文(6) : *His failure to have contact with the other side was fatal to him.*

訳例 : あいつが相手と接触しそこなったのが、結局は奴の命取りとなった。

品詞の転換と「モノ」的志向性、「コト」的志向性に焦点をあてれば次のような説明が加えられるのではないだろうか。例文(5)の二つの訳例に決定的な違いは *millions* への処理であろう。訳例 1 では名詞 *millions* をその「人々」と「モノ」的に処理し、訳例 2 では「～苦しんでいること[の]」に見られるように事象全体を掬い取る「コト」的な訳出になっている。さらに例文(6)でも *failure* の処理において「彼の失敗」とモノ的に訳出するよりもむしろ「あいつが～しそこなった」と名詞から動詞的に読みほどこと比較的日本語としては自然な訳出ができるのではないか。この点は安西の挙げたポイントの①・②・⑥を応用すると、つまり名詞的な要素に文を読み込むと考えると、この例文に見られる品詞転換の操作は実務の立場と言語学的視点の両方から支持することができるように思われる。

(4) 「する」的言語の英語・「なる」的言語の日本語

今度は英日両語の相同性を「する」的言語、「なる」的言語の比較を通して見ていく。まず以下の引用を見てみよう。

（前略）英語では<場所の変化>の動詞が<状態の変化>に転用される（つまり個体中心的な捉え方が本来そうでない分野にまで拡大される）傾向があるのに対し、日本語では本来の<状態の変化

>の動詞が<場所の変化>に転用される(つまり、出来事中心的な捉え方の方が拡大される)傾向があるということを見た。(中略)<場所の変化>という範疇は変化する個体への注目ということを通じて<する>的な考え方と、一方、<状態>という範疇は変化全体への注目ということを通じて<なる>的な捉え方としてそれぞれ相通じるものがあるということ(中略)と解釈してよいであろう。(池上 1981, pp. 280-281)

この考え方も、つきつめれば安西のポイント⑥と密接な関係がありそうである。例えば、**First prize went to John.**という英語をどう「こなれた」日本語に訳出するかを考えてみよう。この場合、**went**の動作性をそのまま反映した形で「行った」と訳出するよりもむしろ日本語の「なる」的性格に意識的であれ無意識的であれ気づいていれば、「一等賞はジョンのものとなった」と日本語として自然な訳が生まれるだろう。ここでも再び確認しておくべき重要なことは、翻訳をする際、目標言語である日本語として日本語の発想・表現の好む傾向を考慮に入れ訳出されることの妥当性が、安西のポイントと言語学的な見地からもある程度支持されることである。

(5) 「個体」スキーマの言語と「連続体」スキーマの言語

また、池上(2000)は「文法的範疇としての<数>」の問題として「個体」と「連続体」に関する議論をしている。

<可算>対<不可算>という区別は、基本的には対象なり内容なりを<個体>として捉えるか、<連続体>として捉えるかということである。<個体>は一定の輪郭を有しているのであるから、その認知に際しては当然その<形態>に注意が向けられよう。<連続体>の方にはそれを特徴づける一定の形はないのであるから、何らかの形を与えられる前の<素材>という点での注目が際立つことになる。(中略)英語の話し手の方は<形態>への注目(あるいは、<個体>志向的)、日本語の話し手は<素材>への注目(あるいは、<連続体>志向的、または、少なくとも<個体>非志向的)という対立がある。(中略)(これには)それぞれの認知的傾向の発達にはそれぞれの言語の習得—つまり、<可算>—<不可算>を区別して表現形式を選ぶことが義務づけられている言語とその必要のない言語という違った形の言語の習得—が深く関わっている。(池上 2000, pp. 130-133)

例文(7) : It is because I like **lamb**s that I don't like **lamb**.

訳例 : 私は子羊が動物として好きだから、子羊の肉は食べない。

例文(7)では **lamb** と **a lamb** (ないし **lamb**s) の違いが大きく問題とされ、前者は連続体としての物質名詞として捉えているため無冠詞で単数形だが、後者は個体としての普通名詞として捉えているため、冠詞 **a** や複数を表す **s** を語尾につけるという操作を行っている。ところが、日本語では言語内にそのような認知の仕方を直接反映させる文法システムがなく、訳出に当たっては「動物として」とか「子羊の肉」と明示的に表現せざるを得ない。このことを踏まえると、英語は物事を明確な輪郭のある個体として認識する<個体>スキーマの言語で、例えば名詞は可算名詞がプロトタイプ(例 : **two books**)であるのに対し、日本語は物事を連綿とした連続体として認識する<連続体>スキーマの言語で、例えば名詞は単複同形で物質名詞がプロトタイプ(例 : 本2冊)であることが指摘できる。

品詞転換論の具体例とその分析

では、実務翻訳家が実際に挙げている品詞転換の例を見ながら、その分析を行ってみたい。

名詞からの品詞転換

●名詞→動詞

例文 1 : A little **reflection** will show you what a stupid answer that is.

訳例 : ちょっと考えれば、そんな答えがいかにかかげているかわかるよ。

【分析】厳密な意味で品詞論を語れば正確さを欠くかもしれないが、この例文において名詞 **reflection** が訳例では動詞的に「考えれば」に転換されている。安西(1983)①・②、さらに池上(1981)における指摘、モノ的志向の英語・コト的志向の日本語という特徴の違いに品詞転換の根拠が求められる。因みにこの品詞転換の影響を受け、形容詞 **little** も副詞「ちょっと」に品詞転換されている。

例文 2 : His **failure** to have contact with the other side was fatal to him.

訳例 : あいつが相手と接触しそこなったのが結局は奴の命取りとなった。

【分析】英語のモノ的志向性と日本語のコト的志向性という発想・認識の違い、さらに安西(1983)の

①・②に基づけば *failure* を「失敗」と名詞のまま放置するよりもむしろ「しそこなった」と動詞に品詞転換をした方が日本語としては自然であろう。

例文 3 : The man who reads only for *improvement* is beyond much *improvement* before he begins.

訳例 : 自分を向上させようとして読書をする人は、読み始める前からすでに向上できる見込みが大してないのである。

【分析】上述の例文と同様、*improvement* を名詞「向上」から「向上させる」と動詞に読みほどこいてやると日本語としてより自然になる。

例文 4 : Communism's *collapse* has *called forth* old animosities and new dangers.

訳例 1 : 共産主義の崩壊は古い敵対関係と新しい危険を呼び起こした。

訳例 2 : 共産主義が崩壊した結果、古い敵対関係と新しい危険が浮かび上がってきた。

【分析】訳例 1 はモノ的志向・「する」的言語の認識の仕方をそのままを残したもの、訳例 2 は英語の発想を、コト的志向・「なる」的言語という日本語の自然な認識の仕方に沿うよう品詞転換したものである。*collapse* の処理において、名詞「崩壊」から動詞「崩壊した」のように品詞転換が起きている。さらに安西 (1983) の①・②にも対応している。

ところで安西 (1983) の⑥、Hartman (1954)、佐久間 (1941)、池上 (1981) の指摘も考慮に入ると、*called forth* の処理において、訳例 1 では「～を呼び起こした」に見られるように他動詞性、つまり英語の「する」的言語の特徴をそのまま残し訳出する一方、訳例 2 では日本語の「なる」的言語の発想の沿った形で「～が浮かび上がってきた」のように自動詞的に処理されている。これは他動詞から自動詞への転換であり厳密に言えば品詞の転換とはいえないが日本語と英語の事象の捉え方の違いを示唆する興味深い操作である。

例文 5 : *Complete analysis* of the deflection of a system *requires* a very sophisticated computer program.

訳例 1 : あるシステムのたわみの完全な解析は、非常に高度なコンピュータープログラムを必要とする。

訳例 2 : あるシステムのたわみを完全に解析するには、非常に高度なコンピュータープログラムが必要である。

【分析】ここでは 2 箇所、品詞転換が起きている。

「完全な」という形容詞が「完全に」と副詞に、さらに「解析」という名詞が「解析する」と動詞に転換されている。この点も日本語らしさという観点から言えば安西 (1983) の①・②、池上 (1981) の指摘である英語のモノ的志向性、日本語のコト的志向性に根拠を求めることができる。ちなみにこれも品詞転換というわけではないが、例文で使われている他動詞 *require* の処理についても訳例 2 では訳例 1 よりも他動性 (transitivity) を減少させ、よりこなれた日本語を訳出することへの可能性も、安西の⑥や Hartman (1954)、佐久間 (1941)、池上 (1981) で指摘できるかもしれない。

例文 6 : The *straightjacket* of Japanese social convention *prevented* Sugiyama from simply walking into the social dance school.

訳例 1 : 日本の社会通念の束縛が杉山が社交ダンススクールに気やすく入ることを妨げた。

訳例 2 : 日本の社会通念に縛られて、杉山は社交ダンススクールに気安く入ることができなかった。

【分析】これは品詞転換が必須であることを如実に表している文である。コト的志向、「なる」的言語である日本語では、訳例 1 のような表現はかなり不自然である。したがって日本語らしい日本語として訳出する際、安西 (1983) の①・②・⑥に基づけば、訳例 2 にみられるように、「束縛」という名詞から「縛られて」と動詞に品詞転換をするほうがこの文では好ましいというよりはむしろ適切かつ必須の処理なのではないだろうか。

●名詞→形容詞

例文 7 : I can't help feeling a lingering preference for the simple *innocence* of the siroto over the initiated *experience* of the kuroto.

訳文 1 : 私は、玄人の経験よりも、素人の純真のほうに未練を感じざるを得ない。

訳文 2 : 専門の道に入って経験を積んだ玄人よりも、単純素朴な素人のほうに未練を感じざるを得ない。

【分析】まず常識として日本語話者であれば訳例 1 のような表現はしないだろう。この例文では抽象名詞「経験」が人間的な「玄人」を修飾する「経験を積んだ」という形容詞に、同様に「純真」という抽象名詞が「素人」を修飾する「単純素朴な」という形容詞に品詞転換されている例である。これは安西 (1983) の②、そして池上 (1981) では、英語のモノ的志向性、日本語のコト的志向性を応用すること

によって根拠を得ることができる。その他安西（1983）④、池上（1982）の仮説 I・II、荒木（1985）により主語はなくても日本語としては自然さを十分に保てる。

●名詞→副詞など

例文 8 : I took a look in <i>some</i> of the other huts. 訳例 : ほかの小屋も <u>何件か</u> 覗いて見た。
例文 9 : He accepted the <i>whole</i> of the proposal. 訳例 : その提案を <u>まるごと</u> 認めた。
例文 10 : They used up <i>all</i> of their food supply. 訳例 : 手持ちの食料を <u>全て</u> 食べ尽くした。

【分析】3つの例文には名詞から副詞への転換が見られる。この根拠は最終的には英語のモノ的志向性と日本語のコト的志向性という特徴に収束されるが、厳密に言うと数量詞遊離 (quantifier floating) 表現をする際、日本語の方が英語よりも自由度が高いということに起因する。例えば日本語では、(a)私には3人の子供がいる。(b)私には子供が3人いる。は両方とも可能。他方英語では、(a)I have three children.は問題ないが、日本語とは異なり、(b)*I have children three.のように数量詞を形容詞以外(例えば副詞)で表現する際に制限がかかってしまう。日本語では遊離された数量詞が副詞的な性格を持っている、または持ちえるというのであれば池上(2000)、安西(1983)①の指摘するように、名詞を動詞的に読みほく日本語のコト的志向性と関連があるだろう。

形容詞からの品詞転換

●形容詞→名詞

例文 11 : Japan can play an extremely important role in helping create a <i>peaceful</i> and <i>prosperous</i> world. 訳例 1 : 日本は <u>平和で栄えある</u> 世界を築くうえで極めて重要な役割を担うことができよう。 訳例 2 : 日本は世界の <u>平和と繁栄</u> を築く上で極めて重要な役割を担うことができよう。

【分析】この例文では形容詞「平和で」「栄えある」が、名詞「平和」「繁栄」への品詞転換された例である。この場合どちらの訳例がすぐれているとは一概に言い切れないケースではあるが、品詞転換が可能な理由を考察する。ここでは安西(1983)の①・②、英語のモノ的志向性、日本語のコト的志向性の違いが間接的に関係しているように思われる。つまり2つの訳例に出てくる「世界」に注目すると、訳例1ではこの名詞「世界」に二つの修飾語句(=形容詞)がかかっている一方、訳例2での「世界」

には修飾語句がかかっていない。これはモノ的志向性を持った英語にはある関係代名詞が、コト的志向性の強い(=モノ的志向性の弱い)日本語にはそぐわない点、すなわち相対的にあまり多くの修飾語句を名詞にかけるのを好まない日本語のある意味で「反モノ」的志向性が見え隠れしているのであろう。

●形容詞→動詞

例文 12 : Young men want to be <i>faithful</i> and are not; <i>old</i> men want to be <i>faithless</i> and cannot. 訳例 : 男というものは、若いうちは女を <u>裏切るまい</u> とするが、現実にはそうは行かない。 <u>年を取ると</u> 、今度は <u>浮気をしたがる</u> が、もはやそれは無理というものだ。
--

【分析】この文では3つの形容詞 *faithful*、*old*、*faithless* が、訳例においては全て動詞に品詞の転換がなされている。この品詞転換をするには、安西(1983)の①・②、特に①の解釈をもう1段階広げる必要があるだろう。つまり動詞に読みほくことのできる品詞は何も名詞だけに限らない、名詞を修飾する形容詞もその動詞に読みほくことのできる要素(文を読み込める要素)があれば、動詞への品詞転換は可能となる。そしてその理由もやはり日本語のコト的志向性に収束させることができるだろう。

例文 13 : <i>Successful</i> marketing requires products that are in demand as well as consistent quality and delivery. 訳例 1 : <u>成功する</u> マーケティングは、需要のある、しかも一定の品質と出荷が可能な商品を必要とする。 訳例 2 : マーケティングで <u>成功しよう</u> と思えば、需要があり、しかも一定の品質と出荷が可能な商品が必要である。
--

【分析】この文も先ほどの例文と考え方は基本的に同じ。

●形容詞→副詞

例文 14 : There are <i>other</i> reasons. 訳例 : <u>ほかにも</u> まだ理由がある。
例文 15 : He made <i>another</i> blunder. 訳例 : <u>またもや</u> へまをやらした。
例文 16 : There are <i>many</i> people around the flag pole. 訳例 : 掲揚塔の周囲に人が <u>大勢</u> 、集まっていた。
例文 17 : "Don't shoot unless I'm dead," he answered in the <i>same</i> toneless voice. 訳例 : 「俺が活着ている限り、打たないでくれ」と彼は <u>相変わらず</u> 淡々とした口調で答えた。

<p>例文 18 : Is that the only way to go there? 訳例 : そこへ行く道は、<u>それしかない</u>のか。</p>
<p>例文 19 : This is why most beacons are built on uninhabited planets. 訳例 : それだからビーコンは<u>たいがい</u>居住民のいない惑星に建てられているのだ。</p>
<p>例文 20 : The entire front of the truck was covered with flames. 訳例 : トラックの前部が<u>すっかり</u>火に包まれていた。</p>
<p>例文 21 : A man was lying dead. 訳例 : 男が<u>一人</u>、斃れていた。</p>
<p>例文 22 : All children naturally want presents on their birthdays. 訳例 1 : すべての子供たちは当然、誕生日にプレゼントをほしがる。 訳例 2 : 子供なら<u>誰も</u>、誕生日にプレゼントをほしがるのは当然のことである。</p>

【分析】この種の品詞転換は、数量詞遊離の表現における、モノ的志向性の強い英語・コト的志向性の強い日本語に対する制限の程度の違いから説明がつく。例文 8 - 10 の【分析】ように、日本語における数量詞遊離の自由度は英語よりも高い。結果として遊離した数量詞（形容詞）は動詞を修飾する副詞に転換することが可能となり、品詞転換をしない訳出よりも自然な表現ができる。安西（1983）の②にも間接的に対応するだろう。

副詞からの品詞転換

●副詞→名詞

<p>例文 23 : If a beacon has to go on a planet with a culture, it is usually built in some inaccessible place. 訳例 : 文化のある（原住民のいる）惑星にビーコンを設置する必要がある場合には、どこか人の近づけない場所に建てる<u>ならわし</u>になっている。</p>
<p>例文 24 : He habitually flies into rage. 訳例 : 彼はカンシャクを起こす<u>癖</u>がある。</p>

【分析】例文 23 では「普通は、たいてい」などと辞書を介して訳される副詞が名詞「ならわし」に、例文 24 では「いつも、常習的に、習慣的に」などと訳される副詞が名詞「癖」に品詞転換されている。ここでは、安西（1983）の⑥、さらに池上（1981）の指摘に基づけば、日本語が「なる」的言語であるということに品詞転換の根拠が間接的に求められるかもしれない。訳例では「なる」的言語の特徴に沿うように、つまり他動詞性を抑え、自動詞的な要素を述部に持っていく操作をしたことになんらかの影

響を受けている可能性がある。

●副詞→動詞

<p>例文 25 : Four Phantom fighters have reportedly been ordered to take off pending the President's final decision. 訳例 : 大統領の最終決定が下るまで、とりあえず、ファントム戦闘機 4 機に発進命令が下ったと<u>報じられている</u>。</p>
<p>例文 26 : This would mean an effective end to RFE/RL, the American sponsored stations successfully and effectively broadcasting to Eastern Europe and the former Soviet Union. 訳例 1 : これは RFE/RL、すなわち東ヨーロッパと旧ソ連向けに<u>成功裡に</u>また<u>効率的に</u>放送してきた米国政府支援の放送局の実質的な終わりを意味することになる。 訳例 2 : これは RFE/RL、すなわち東ヨーロッパと旧ソ連向けに放送して、<u>成功し効果を上げてきた</u>米国政府支援の放送局の実質的な終わりを意味することになる。</p>

【分析】例文 25 では副詞 reportedly が動詞「報じられている」と訳されており、例文 26 では副詞「成功裡に」「効果的に」が「成功し」「効果を上げてきた」と、内容的に動詞の形に読み解かれているものである。この品詞転換に関しては、安西（1983）の①の応用、そして日本語のコト的志向性を応用することに根拠を求めることができるかもしれない。

●副詞→形容詞

<p>例文 27 : The current slaughter in the old Yugoslavia can be best described as one of the savagest atrocities of this Century. 訳例 1 : 旧ユーゴスラビアでの現在の殺戮は、今世紀の最も野蛮な残虐行為の 1 つであると<u>最もよく</u>説明することができる。 訳例 2 : 旧ユーゴスラビアでの現在の殺戮は、今世紀の最も野蛮な残虐行為の 1 つであると説明した方が<u>最も適切</u>である。</p>
<p>例文 28 : We certainly had a much more cheerful game than the day before. 訳文 1 : われわれは<u>確かに</u>、前の日よりはるかに愉快な試合をした。 訳文 2 : 前の日より、はるかに愉快な試合を<u>だ</u>ったことは<u>確か</u>だ。</p>

【分析】この 2 つの例文では、副詞「最も良く」、「確かに」が「最も適切である」、「確かだ」と形

容詞的（厳密には形容動詞）に品詞の転換がなされている。その根拠は安西（1983）では③・⑥、そして認知言語類型論的に言えば、「する」的言語・「なる」的言語における他動性の違いに注目すると求められるかもしれない。つまり「なる的」言語（⇨反「する」的言語）である日本語の特性に基づき、「動作主＋他動詞＋目的語」という構文の他動詞性を落とすという操作を行った結果起きた品詞転換であろう。しかし問題は、確かに品詞の転換は可能だが、品詞転換をした訳例2が、訳例1よりも自然な日本語であるかどうか証明できていない点では課題が残る。因みに訳例2における主語の省略は安西（1983）④、池上（1982）の仮説I・IIから支持される。

以上より、日本語「らしさ」は以下のようにまとめることができよう。

日本語の場合繰り返し立ち現れてくるのは、輪郭の定かでない記号化（つまり、＜無界性＞（unboundedness）への指向性）ということであるように思える。このことは、＜モノ＞的な把握と並んで＜コト＞的な把握（とりわけ、その＜変化＞の様相における＜ナル＞的なイメージ・スキーマでの把握）への傾斜が相対的に目立つということ（池上 1981 参照）ばかりでなく、＜モノ＞的な把握に対する＜トコロ＞的な把握の相対的な目立ちにも反映されているのではないか。そして、そのような＜無界性＞への指向性は、究極的には、積極的に他者に働きかけ、影響し、変化させるという＜動作主＞（agent）としての人間という主客対立的なスキーマよりも、受身的に他からの刺激を感じ取って内在化する＜感受者＞（sentient）としての人間というスキーマが言語化の過程で根強く働いているということと無関係ではないのではないか。（池上 2000, pp. 319-320）

目標言語に「わかりやすく」訳すためには、以上見てきたような品詞転換（あるいは広く、構文転換）を行いつつ、「目標言語らしさ」を確保する必要がある（翻訳通信 101 号に記した「目標言語規範」）。そのためには起点言語・目標言語双方の「その言語らしさ」を認知的スタンスから如実に比較・対照し、「わかりやすい」「自然な」「こなれた」表現を絶えず工夫することが大切である。また、このことは翻訳教育にも生かされるべきで、このような考察は指導の際の具体的な指針になるだろう。さらに、翻訳の各専門分野やさまざまな翻訳形態ごとに「わかりやすさ」を個別・具体的に検討する必

要性もあるだろう。「目標言語らしさ」を基盤に、それぞれの翻訳の目的（skopos）に応じた規範（norm）の個別的検討も必要となるだろう。

品詞転換論再考—「直訳の創造性」

最後に日本語「らしさ」を追求する翻訳スタイルの是非について語っておく必要がある。それは「直訳の創造性」についてである。

前述のように、安西の「翻訳英文法」をはじめとした諸々の翻訳技法に関し、そのような技法は一面に過ぎず、必ず常に成り立つものではないとの主張を別のプロの翻訳家が行うことも耳にする。これは単に、同業者に対するいわれのない批判ではなく、現実的に日々の翻訳実践のなかで体得した実務経験からの主張である。よく目を凝らしてみると、諸々の翻訳技法を説いている翻訳家も実際の場面ではその技法を採用していなかったり、逆にそれに異を唱える実務家はその技法を採用していたりする。

品詞転換に限って端的に言えば、「日本語らしい」訳文を産出することが好ましいと判断すれば品詞転換技法を使い、好ましくないと判断すれば品詞転換は行わないのである。上述のように「日本語らしさ」はある種の典型（prototype）であって、文体上日本語の典型の「型」にはまった訳文のみを産出すると、まったく陳腐な文体になってしまう。斬新さを出し、パンチの効いた文体を得たいと思う場合、典型から外れた文体で読者を圧倒することも必要とされよう。

この点、井上（2005）は、「言語構造、統語法の類似した西欧近代語間における翻訳とは異なり、語・句・節の大幅な構造転換を必須とする西欧近代語、日本語間の翻訳」を外国文学でも日本文学でもない「第三の文学」と称し、次のように特徴づけている。

西欧語の構造をそのまま取り込まずとする直訳風文体は、構造を伝えきれぬことによって生じた軋み、不自然さも含めて、それまでの日本語にはなかった目新しい表現として、あるときは好意的に迎えられ、またあるときは「純粋な」日本語の阻害要因として排除されてきた。換言すれば、日本語を豊かにする動因として直訳調をむしろ歓迎せんとする意識と、日本語の伝統の枠を逸脱したものとしてそれを忌避する意識との間の、不断の揺れ動きと往復運動が、日本語、日本文を変容させてきたのである。（井上 2005, pp. 177-178）

つまり、第三の文学は翻訳文体として新文体を切

り開いていったのである。近代日本は、二葉亭四迷、森鷗外、森田思軒、岸田国土、神西清などを経て、第二次大戦後の野崎孝、村上春樹にいたるまで、数多くの時代を切り開いた「第三の文学」を生み出してきたと井上は述べている（井上 2005, pp. 179-180）。

では、平成の世における翻訳はどのような様相を呈しているのでしょうか。翻訳文体が日本語を活性化させ、活性化された日本語が翻訳文体にも影響するという円環をこれまで続けてきたし、今後もその円環は止むことはないだろう。しかしながら、かつてよりも相対化されたとはいえ、その両者には分かれたい根深い差異があり、翻訳者は外国語と日本語との間に在って、絶えずある分裂と葛藤を強いられながら、「読みやすさのパンチ」と「斬新な文体のパンチ」の両者を利かしてゆくことであろう。

参考文献

- 荒木博之（1985）『やまとことばの人類学—日本語から日本人を考える』朝日新聞社
- 荒竹三郎（1998）『英文翻訳ルールブック』荒竹出版
- 安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』開拓社
- 安西徹雄（1982）『翻訳英文法—訳し方のルール』バベル・プレス
- （1983）『英語の発想—翻訳の現場から』講談社
- （1994）『翻訳英文法徹底マスター』バベル・プレス
- （2006）『翻訳英文法トレーニング・マニュアル』〔2版〕バベル・プレス
- 安西徹雄・井上健・小林章夫（編）（2005）『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社
- 別宮貞徳（1979）『翻訳読本 初心者のための八章』講談社
- 江川泰一郎（1991）『英文法解説』〔改定三版〕金子書房
- 岳真也（1994）『英日翻訳文章表現法 英文和訳から翻訳へこなれた日本語表現の技法』〔新装版〕バベル・プレス
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店
- ほか（1982）『日英比較講座第4巻：発想と表現』大修館書店
- （2000）『日本語論への招待』講談社
- 稲生衣代・河原清志（2010）「英語ニュースの字幕翻訳ストラテジー」青山学院大学英文学会（編）『英文学思潮』第83巻（予定）
- 亀井忠一（1994）『頭からの翻訳法』信山社

河原清志（2009）「英日語双方向の訳出行為におけるシフトの分析—認知言語類型論からの試論」日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会（編）『翻訳研究への招待』第3号：29-49頁

河原清志・永井那和（2005）「認知言語類型論に基づく日英通訳・翻訳における品詞転換方略の分析」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科（編）『異文化コミュニケーション論集』第3号：81-94頁

宮川幸久・綿貫陽・須貝猛敏・高松尚弘（1988）『ロイヤル英文法』旺文社

三好弘（1980）『すぐつかめる英語翻訳のコツ』朝日出版社

中村保男（1982）『翻訳の秘訣 理論と実践』新潮社

中村眞佐男・氏木道人・氏木孝仁（2007）『翻訳入門—英日編—』〔改定2刷〕大阪教育図書

佐久間鼎（1941）『日本語の特質』育英書店

竹下和男（2007）『英語は頭から訳す 直読直解法と訳出技法14』北星堂

田辺希久子・光藤京子（2008）『プロが教える基礎からの翻訳スキル』三修社

安井稔（1996）『英文法総覧』〔改訂版〕開拓社

横井忠夫（1991）『誤訳悪訳の病理』〔新装第1版〕東洋書店

Catford, J.C. (1965). *A linguistic theory of translation*. Oxford: OUP.

Chesterman, A. (1997). *Memes of translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Hartman, H. (1954). *Das Passive: Eine Studie zur Geistesgeschichte der Kalten*, Heidelberg: Italiker und Arier.

Newmark, P. (1988). *A textbook of translation*. London: Prentice Hall.

Nida, E. (1964). *Toward a science of translation*. Leiden: Brill.

Vinay, J.-P. & Darbelnet, J. (1958). *Stylistique comparée du français et de l'anglais*. Paris: Didier. translated and edited into English by Sager, J.C. & Hamel, M.J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

最難関を目指す「翻訳通信」翻訳コンテスト

「翻訳通信」翻訳コンテストのお知らせを再掲載する。締め切りまであと1か月強になった。

一読したぐらいでは理解できない文章こそ、翻訳する価値がある。そういう観点から、難しい課題の翻訳を競うコンテストを企画しました。

第1回の課題は J.S. Mill, *The Principles of Political Economy, Book 4, Chapter 6, Of the Stationary State* です。読めば分かるように、アダム・スミス『国富論』第1編第8章やトマス・マルサス『人口論』の見方を批判したものであり、150年前に書かれているものの、現代的な意味が大きいとみられます。これを課題に選んだのは、経済学文献のアンソロジーを企画しており、そこに収録したいと考えているからです。

翻訳は容易でないので、腕の見せ所がたくさんあります。とくに、原文の論理をどう伝えるかが難題です。いわゆる翻訳調ではミルの論理を日本語で伝えるのは難しいので、翻訳のスタイルと訳文の文体を工夫する必要があります。

アンソロジーに収録したい文献なので、優秀作は出版用に採用する計画です。優秀作の賞金、賞品などはありませんが、出版に使った場合には当然ながら、印税が発生し、出版社から現金で支払われます。ただし、出版時期は決まっていませんし、アンソロジーの企画自体が実現しない可能性もあります。ですから、優秀作に選ばれた場合にも、当面は「翻訳通信」の紙面で紹介されるだけだとお考えください。

応募者の年齢、翻訳経験、職業などの制限は一切ありません。たとえば、訳書が100点以上ある翻訳家でも、1点もない学習者でも応募できます。ただし、グループ訳は受け付けません。何人かのグループで検討した場合にも、各人がみずからの責任で応募してください。制限はこの点だけです。

古典の翻訳では既訳を参考にするのは当然です。参考にした場合には、訳文の終わりに参考文献としてあげてください。ただし、既訳を参照した結果、翻訳の質が低下する場合があります。既訳は手に入りにくいので、無理をして入手する必要はないと考えます。図書館などで既訳を探す時間を原文の読み込みにあてた方が良い結果になる可能性は充分にあります。

応募要領

課題：[J.S. Mill, Of the Stationary State全文](#)（以下に冒頭部分を示します）。

書式：[所定のフォーム](#)でMSWordで作成

締め切り：2011年1月10日

送付先：電子メールの添付ファイルにて以下に送付

GFC01200アットnifty.ne.jp（アットは@に変更）

電子メールの件名：翻訳コンテスト応募

電子メール本文に以下を明記ください。

氏名：

本名（氏名が筆名の場合）：

住所：

職業：

電子メール・アドレス：

Of the Stationary State

1. The preceding chapters comprise the general theory of the economical progress of society, in the sense in which those terms are commonly understood; the progress of capital, of population, and of the productive arts. But in contemplating any progressive movement, not in its nature unlimited, the mind is not satisfied with merely tracing the laws of the movement; it cannot but ask the further question, to what goal? Towards what ultimate point is society tending by its industrial progress? When the progress ceases, in what condition are we to expect that it will leave mankind?

It must always have been seen, more or less distinctly, by political economists, that the increase of wealth is not boundless: that at the end of what they term the progressive state lies the stationary state, that all progress in wealth is but a postponement of this, and that each step in advance is an approach to it. We have now been led to recognize that this ultimate goal is at all times near enough to be fully in view; that we are always on the verge of it, and that if we have not reached it long ago, it is because the goal itself flies before us. The richest and most prosperous countries would very soon attain the stationary state, if no further improvements were made in the productive arts, and if there were a suspension of the overflow of capital from those countries into the uncultivated or ill-cultivated regions of the earth.（注意：これは冒頭部分のみです。[全体はこちらにあります。](#)）

大野一訳『闇の奥』第1章について

「翻訳通信」第98号（2010年7月号）で読者に投稿を呼び掛けたところ、すでにいくつもの投稿があり、心強く感じています。河原清志さんの連載は100号記念号に依頼した寄稿の続きですから、読者投稿とは少し性格が違いますが、福田知美さんの「おすすめしたい韓国の本」という連載は読者から寄せられたものです。11月号で福田さんが紹介した『わたしの英語勉強法』には出版社が関心を示していますので、今後、翻訳出版される可能性もあります。

そして今月号では大野一訳、ジョゼフ・コンラッド著『闇の奥』の第1章を紹介できるようになりました。中野好夫訳（岩波文庫）や藤永茂訳（三交社）、黒原敏行訳（光文社古典新訳文庫）など、いくつもの既訳がある名著ですが、既訳にはない魅力があると判断して掲載することにしました。

大野さんは『最強の経済学者ミルトン・フリードマン』（日経BP社）などの訳書がある若手翻訳者ですが、経済、政治といったノンフィクション分野からフィクションの分野に進出したいと考えているようです。

コンラッド（1857～1924年）はポーランド出身のイギリスの作家であり、20世紀初めに出版された『闇の奥』は代表作であり、傑作です。死後62年以上が経過して著作権の保護期間が切れていますので、翻訳を自由に発表できます。そのため、「翻訳通信」で新しい訳を発表するにはまさにぴったりの作品だと思えます。

大野訳の『闇の奥』に関心をもたれた編集者には、山岡まで連絡いただけるようお願いいたします。大野訳の批評などの投稿も歓迎します。また、原著者の死後62年を経過している著作の翻訳の投稿を歓迎します。大野一訳の『闇の奥』を読むと、ハードルが高いという印象をもたれるかもしれません。ですが、出版翻訳は本来、ハードルがとても高い仕事です。ハードルが高いからこそ挑戦のしがいがあると考えてくださる方の投稿を歓迎します。

『闇の奥』は当然ながら縦書きになっていますので、以下に一部を紹介し、第1章全体は別ファイルとします。[第1章全体（20ページ）はここをクリックしてください。](#)

闇の奥

ジョゼフ・コンラッド

大野一

小型帆船、ネリー号は錨を下ろし、あげた帆に音もなく、静かにたゆたっていた。潮が満ち、風はほとんどなく、河を下るなら、停泊して潮の変わりを待つしかない。われわれの眼前には、果てのない航路のはじまりのようにテムズの河口が広がっていた。沖は継ぎ目なく空に連なり、まばゆい水面には上げ潮にのる艇の灼けた帆、あかねの帆影の鋭く尖ったのがじつと群れているようで、ニスを塗った斜檣が光を返す。霞の立つなぎさは海原を匍い、どこまでも平らかにきえていく。グレイブズエンド上空は暗く、さらに奥に向かって影が寄り集まるよう、あの世界一の大都市は、そこだけ動かない重苦しい闇に包まれているようにみえた。

招待してくれたのは、船長を務める会社役員。舳先に立つて海のほうを眺めるその後ろ姿を、われわれ四人はほれぼれと視つめていた。この河のどこを探しても、これほど船の似合う男はいない。船乗りにとって信頼の代名詞とも云える水先案内の風格を備えていた。この男の仕事場が、まばゆい水面ではなく、背後にけぶるあの闇のなかにあるとは、信じがたい思いがした。

以前にもどこかで書いたが、われわれには海と云う絆がある。どれだけ会わなくても心が通じるだけでなく、相手の長話や説教さえも寛しあえる気持ちになる。弁護士は昔気質の好い男、年長者の威厳と人柄でデッキにひとつのクッションをとり、船にひとつの敷き物に寝そべっている。会計士は早くも骨牌の箱を取り出し、重ねた牌をまさぐっていた。マローウは船尾に胡坐をかき、後檣に凭れている。